

私のランドスケープ的生き方の中で渡された 沢山のバトン

Many Batons to Carry on for the Future

三谷 康彦*
Hiko MITANI

私の恩師：小島浅造 先生

明治44年11月23日生まれ。小島佐一氏の実弟。京都小島庭園の親方。
頑固に浅造流の庭作りに明け暮れ、82歳で没する直前まで従事。平成6年1月30日没。
箒と手ボウキが何故か大好きな親方で、時間があれば掃き清め作業をしておられた印象は強烈であった。



写真-1 小島浅造

私の恩師：Peter Walker 先生

ランドスケープアーキテクト（Peter Walker, 1932年-）はアメリカ合衆国のランドスケープデザイナー、アーバンデザイナー、環境デザイナー。前妻マーサ・シュワルツもアメリカのランドスケープアーキテクト。ハーバード大学のランドスケープ学科長をつとめ、幾多のデザイン事務所の所長を経験、1972年にはヒデオ・ササキと共同でSasaki Walker Associatesを設立した。後に2人は袂を分かち1983年Peter Walker and Partnersを設立した。最近では国際コンペの入賞作New Yorkの9.11 Plazaも昨年度完成し好評を博す。今なお現役で、各方面で活躍中。



写真-2 Peter Walker

* (株) MLS

はじめに

東京の名園と謳われる六義園庭園の近傍、江戸時代の植木屋の巣「染井の里」にも程近い「駒込」の地で、「株式会社MLS」と言うスタジオ事務所を構えさせていただいている三谷康彦です。「恩師からのバトン」と題したエッセイを書くようにとの御下命を本誌編集委員長の小野良平先生より頂戴し、執筆条件たる「現役世代」に私が該当するのか否か甚だ微妙な所ではあるが、1947年生まれのものとしては、丁度ランドスケープの「恩師探し」に過去を少し振り返り俯瞰するのも、まんざら悪いことではないと思いなおし、少し文章を書かせて頂くことにした。

中村一先生、吉田博宣先生、森本幸裕先生達との出会い

さて1970年3月に、まだ大学闘争の火種が残る信州大学農学部を卒業、当時の状況下では卒業式などと言うセレモニーも行われなかったと記憶するが、林学科の森林経理研究室を主宰されていた菅原聡先生のご紹介で、京都大学の岡崎文彬先生の研究室を訪問し、当時助教授でおいでだった中村一先生や、当時講師であられた吉田博宣先生等にもご挨拶した。また、思い返せば、当時院生であった森本幸裕さん、白幡洋三郎さん、尼崎博正さん、北大から来た小野寺浩さんなど、ユニークで元気で、少し斜め掛かった錚々たる人材で、エネルギーが溢れかえっていた。

とはいえ、当時の僕は「造園学」等と言う分野には全く興味がなく、毎日数時間の西部講堂でのトランペットの練習に通うのが仕事の毎日。信州でもやっていたジャズのトランペットにまだ拘っていた頃であった。

近藤さんとの出会い

まだ寒い春の夕方、いつもの様に練習をしていると、遠くの方で同じくトランペットの練習をしている音が聞こえる。近くに寄って行って話しかけたのが、当時近藤 俊則と名乗っていた、現在の近藤等則（こんどう としのり）さんであった。彼は、日本を代表するトランペッター・音楽プロデューサーで愛媛県今治市出身。京都大学工学部から同文学部英米文学科に転じて卒業。京大在学中から、山下洋輔トリオとセッションを行ったり、京都・大阪等での演奏活動など、プロとして十分に通用する、基礎も理論も演奏も素晴らしいミュージシャンであった。現在は、国際的に活躍する日本を代表するフリージャズトランペット奏者である。彼のトランペット演奏は極めて特徴的かつ激しい吹奏を行うことで知られている。近藤さんも後に海外に渡って数々の大物・一流アーティストとセッションを重ね、ノイズ、アンビエント、トランス等のサウンド手法を取り入れたオリジナリティ溢れる演奏は海外でも高く評価されている。演奏ライブに留まらず画家とライブペインティングを行うなどのプロジェクトなども精力的に進めているよ

うだ。

おっと、話が音楽方面の方に大きく逸れているので、話を元に戻すと、食い扶持稼ぎに京都の吉村元男さんが主催していた、当時のEDA造園にアルバイトに行き始めた。

Environmental Developmental Associationという、当時としては最先端の名前を冠した公共系のプロジェクトの計画・設計事務所で、EDA造園の京都事務所に何とか潜り込んだ。

村田邦雄さんとの出会い

EDAの京都事務所の所長をしていたのが村田邦雄さんと言う兄貴的存在の造園家。彼は言うなればヒッピーの走りの様な世界を旅するさすらいのミュージシャンであった。村田さんは「旅」に出かける資金稼ぎのために造園家の縫いぐるみを着ている様なところがあった。

彼のもとで設計やデザインの実似事を、斜めに構えながら習得したが、しょせんはマネのソノまた真似。結局70年に大阪の千里丘陵で行われた万国博覧会の跡地に建設された跡地公園の基本設計や実施設計に関わったり、公共役所系の大規模な公園の設計実務に関わったが、実際に出来上がってくる1:1のモノとのギャップを強く感じていた。

その後、縁あって個人庭園が得意な辻口忠夫さんの庭園設計事務所で少しお世話になったりしながら考えたのは、やはり日本で造園の仕事をしていくのには、日本の庭の心やディテール、植栽、石などが分からなければ全く話には成らないのではないかと思に至ることに成った。

西村金蔵さんと和泉正敏さん、そして矢野興さん

村田邦雄さんの紹介で、当時大阪で「石のデザイン室」を主宰しておられた、矢野興さんに会いに行き、しつこく弟子にしてほしいと頼んだり、また矢野さんの紹介で京都の極上の灯籠打ちの北白川、西村さんのお宅にお邪魔して話を聞かせて頂いたり、四国牟礼の和泉正敏さんのアトリエにしょっちゅうお邪魔したりしながら、モノを作る人たちとの距離が少しずつ近くなってきた。

庭師の丁稚に！職人への道……

やっとなんか「自分探し」にケリを付けて、京都の上桂の庭師の小島浅造氏の店を訪問し丁稚での入門をお願いしに行った。最初はけんもほろろ、「大学まで出てるのに、職人なんか勤まるわけがおまへん。帰っておくれやす!!」と突っ返される。また次の日に店を訪ねて、「そこを何とかお願いします。何でもやります!!」と言うやり取りの挙句、やっとなんか許可され入門となった。

通いの「丁稚」で、頂けるご給金はスズメの涙。でもモノや道具に囲まれ、職人さんから話を昼休みに聞かせてもらえるだけでも楽しく、「目から鱗」の毎日であった。全

てが分からないことだらけ、知らないことだらけ……でも、すべて吸収する一方の毎日で、充実感あふれる日々であった。後で思えば20代半ばから後半にかけての頃、この時期のあの体験を逃していると、今の自分は決して無かったとつくづく思う。庭園の樹木の剪定整枝から、御陵等のマツの高木剪定、石張り、石積、庭石組、左官仕事、竹垣・穂垣などの垣仕事、など等ありとあらゆるモノを創る仕事を実施で学んだ経験。たぶん当時庭を創る量も多かったのだので、仕事はきつかったが、学ぶチャンスも多かったのだろうと思う。体も同時にみるみる強健に逞しくなって行った。

いつも「母屋」と呼んでいた、小島浅造親方の兄貴が主催する松尾の小島佐一さん率いる小島庭園工務所とも職人さん達の行き来が在り、優秀な職人さんがしょっちゅう応援に来てくれていたのも幸いしたし、多くの庭園系の材料屋さんにも多くのことを教えて頂いた。

気張った甲斐あって3年少々で通いの丁稚から、通いの職人にしていただき、御給金も少しばかり上がり、現場にも一人で行かせて頂くことが増え、まだまだ学ぶことは多いものの、店へのお礼奉公と、徐々に自分がやりたかった新しい庭の形などを模索し始めることになる。この辺りでやっと30歳を少し超えたあたり。

設計と施工の融合と、村田邦雄さんの影響で海外へ

その後、縁あって小島庭園工務所に舞い込んだ鎌倉の鶴岡八幡宮の源氏池回りに創られることに成ったボタン園の設計を「母屋」から依頼され、その仕事で舞い込んだある程度纏まった金額の設計料を懐に、アメリカ・メキシコ・グアテマラ・エルサルバドル等の北米・中米を目指しての放浪の旅に出かけた。丁度12月の暮れも押し迫ったところに日本を発って、まずは信州大学時代の音楽仲間、ジャズのドラマーを目指していた村井さんを訪ねて、ワシントンD.C.郊外のアーリントンの村井さんの住んでいたシェアーハウスに転がり込んだ。

しばらくアーリントンの村井邸に身を寄せながら、シェアーハウスのシェアーメイトの、日本から来たヒッピー風の寿司職人佐野さん、D.C.の大学に通う美佐ちゃん、そして当時内戦状態にあったエルサルバドルから難民として逃げ出してきたこれも女子大生、達と仲良く楽しく過ごしていた。時間を見付けては、D.C.のスミソニアン博物館に行ったり、国立樹木園を訪問したりするうちに色々な現地の人々と知り合いになり、ある人の紹介でPotomacと言うメリーランド州の超高級住宅地にてガーデンセンターを経営するオーナーを紹介された。このガーデンセンターの一角に「少し日本的な庭」を創ったのが、結構評判になった。

新聞に載ったり、取材されたり、はたまたテレビの対談に出たりして、ちょっとした町の有名人になった。これ

が、そもそものアメリカに長く住み始めるキッカケだ。

その様な動きに目を付けたオーナーのボブさんが、「スポンサーになってやるので、ここで仕事をしないか？新しく君のランドスケープ・デパートメントを作るので。また、下に人を雇い入れても良いから、やってみないか？」と言うオファー。アメリカにもうしばらく滞在しようかと考えはじめていた頃なので、OKを出した。その後ラッキーにも、特にPotomacエリアに住む、インターナショナルな感覚を好む政府の高官、弁護士、ロビースト、実業家など、多くの施主が付いてくれて、特に米国政府労働省の高官であった施主にも気に入られたのはラッキーであった。労働ビザもかなり早く取得、続けて米国の永住権も1年半くらいで習得した。

ガーデンセンターのランドスケープ設計・施工部門なので、当然施主は自分の店の材料を使わせたいが、こちらは別のナーセリーに気に入った植物や材料が在れば、施主に直接買わせたりして材料支給の仕事をする。すると売り上げが伸びないのでボブさんは不機嫌になる。当然のこと。

永住権が取れば基本的な権利は選挙権を除いて、すべて通常の米国民と変わらない。個人的にもやりたいデザインや庭のかたちも溜まってきていたので、週の半分はボスのボブの所で仕事するが残りの半分は、自分の仕事をしたのだが……、と申し出た所、彼の答えは即答で“All or Nothing !!”と。で、即座に僕は“OK, Then Nothing”と答えてしまった愚かさ。

負けれない真剣勝負の開始

それから、(一言でいうのは簡単だが)、自己の株式会社と事務所を立ち上げ、道具一式を揃え、合法的に工事なども行えるライセンスを取得し、会社のアカウントを銀行で開き、会計士を決め、ありとあらゆる苦勞の末に突然に事業が始まった。今思えば、この辺りで本当に必要に迫られて、実際の英語がどんどん上達していったんだと思う。

本当にラッキーにも、事務所オープン後から、仕事の方はロコミで広がり、大小様々なプロジェクトを設計施工した。D.C.のど真ん中のIMFとWorld BankのJoint Libraryのコートヤードや、ビルなど用大型のエアコンメーカーBoland Trane Companyの本社のLandscape、Bolandさんの自宅の庭、当時レーガン大統領時代の国務長官ジョージ・シュルツ氏の庭、NASA長官James Beggs氏の庭、U.S.Armyの4つ星将軍General Twitchell氏の庭、等等。

米国東海岸Washington,D.C. Metropolitan Areaのバージニア州のアーリントンのバックパックでの旅装のままシェアーハウスに転がり込んでから、メリーランド州の高層(低所得者用)賃貸アパートに引っ越し、その後タウンハウスの1階庭付きに引っ越し自営開始、そして間もな

くロックビルに家を買ひ、その家をリモデルして売却、もっと広い敷地の家に引っ越し、車が4台置ける作業場兼ガレージを自分で設計建築、トラック2台、フルサイズの大きなバン1台、乗用車1台、等等、どんどんモノが増えて行った。

アメリカ人の従業員も増え、事務所も安定期に入り、メリーランド州ランドスケープアーキテクトのライセンスも（これまた3年がかりでやっと）修得し、設計料だけでも成り立つ程度の大きさのプロジェクトが入り始めたころ、好事魔多し。従業員の一人が仕事の帰りに会社のトラックでトレーラーを引っ張ってのS字カーブの狭い道で出会い頭に交通事故を起こしてしまった。こういった事故は人を使うビジネスをしていると付き物ではあるが、初めての裁判所出頭そして裁判。結果的には保険がすべてをカバーしたが、訴訟社会アメリカの実情を垣間見るような嬉しくない経験であった。しかし保険屋の友人、そして弁護士に友人達に、大いに助けられたのは良い思い出。

ベルリンの壁崩壊のショック

折も折、ベルリンの壁が崩壊し、東西の冷戦も終焉のニュースをテレビで放映する毎日。大学を出て日本からは遠いアメリカの東海岸でのこのちっぽけな事業をこのままあと10年続けて行けば、間違いなく動けなくなって、アメリカ人一世誕生となるのだろうか……本当にこのままで良いのか？と言う疑念がふつつつとわき起こり出した。日本人の自分が出ることは、もっと他にあるのではないのか？もっと違うことに人生を掛けるべきではないのか？と言う誰何の毎日。

西海岸への興味、インターナショナルな仕事

物理的に日本にかなり近い西海岸での状況を時折の西の友人との交流で垣間見ていたので、纏まった時間を作って、サンディエゴからポートランドまでの主だった都市を北上しながら、各都市の代表的なLandscape Architectureの事務所を、片っ端から訪問して回った。その途中でサンフランシスコの当時BushとFilmoreの角にあったPeter Walkerの事務所にも寄ったが、あいにくPeteは留守で、秘書のJaneが対応してくれ、事務所を案内してくれた。大手事務所のEdawやSWAなどにも立ち寄り、PortlandのBob Murase事務所にも寄って、旧交を温め、（京大の岡崎文彬先生の緑研究所にBobは暫くいたし、吉村元男さんの環境事業計画研究所にも少しいて、机を並べた経験もあった。）いくつかの作品を見せて頂いた。

彼のシアトル事務所にもお邪魔させてもらった。

一本の電話

西海岸ツアーも終わり、本拠地のメリーランドに戻って

少しした頃、Bob Muraseから電話が入り、サンフランシスコのPeteの事務所で、日本のLandscape事情が分かり、且つアメリカのLandscapeビジネスも分かる人間を探しているとのこと。で、早速Peteの秘書でOffice ManagerのJaneに電話して、話の内容を確認。Peteの事務所で当時幾つかの日本での物件をやっているが、コンサルタントとして相談に乗ってくれる人を探しているとのこと。ふとした縁から、Peteの事務所とメリーランドの自己事務所を往復して、日本物件の相談に乗り始めた。Peteの事務所は、磯崎新さんの播磨公園都市プロジェクトのランドスケープ設計にも関わり始めており、その他、谷口吉夫さんのIBM幕張や丸亀の駅前広場など、コミュニケーションから技術的なサポートや、デザインヒントなどの抽出など諸もろのお手伝いをし始めたのが一番最初であったと記憶する。

Peteの事務所へ

東海岸では、目上の人には必ずMrを付けて呼んでいたが、一番最初にPeter Walkerに会った時に、Mr.Walkerと呼んだところ、“Call me Pete”と言われたのが凄く印象に残っている。見渡せばみんなPeteと呼んでいるのだ。ああ、カジュアルな西海岸にやって来たな！！という実感がふつつつ湧いた。全てにおいてカジュアルなパーティー好きの事務所で、すぐに馴染めたが、実際には「客人」あるいは「外部のコンサルタントの人間」としての立場の間だけのこと。そのうちにPeteから事務所に入らないかとのお誘いを受けて、移籍の条件の交渉開始。結局Peteの事務所サイドが、引っ越しに掛かる費用をすべて持ってくれると言う条件での大陸横断大移動の引っ越しとなった。

メリーランド州ロックビルの家は売却、事業は車や道具その他一式と、施主共々、番頭をしてきていた韓国出身の若者に売却、事業を彼に継続してもらうことにして、9年間の東海岸生活をリセットすることになった。

アメリカ人の事務所の生存競争

スタッフの一員に成ったとたんに、今までフレンドリーだった仲間たちの態度が激変、彼らの立場を脅かし、生き残りを掛けた競争相手と位置付けが変わる。

その中で、戦いに勝った者だけが事務所に残る、と言うアメリカ社会のシビアな現実を目の当たりにした。とは言う僕も、何人の仲間を蹴落としたことか……。

こうした表面上はフレンドリーで、その実、日々生存競争の環境に長くいると、性格が悪くなりそう。そもそも、

Peter Walkerの事務所は数人の全く性格や守備範囲が全く違うパートナーたちに役割分担、権威委譲をし、相互チェックと競争をさせながらより先鋭的で冒険的なランド

スケープを展開するという手法、これは一定程度有効で、その後も時折参照するに足りるマネージメント手法であることに気付く。

磯崎さんとの播磨関連プロジェクト、加藤源さんや谷口吉夫さんとの丸亀関連プロジェクト、押野見邦秀さんとの鹿島デザイン関連プロジェクト、その他単発のプロジェクトを経て、Peter Walker 事務所の卒業制作の積りで取り組んだ豊田市美術館のプロジェクトを設計監理までやり無事にまとめあげて、7年間お世話になった Peter Walker 事務所を辞することに成り、プロジェクト関連でお付き合いのあった日建設計から声を掛けて頂いて、移籍することになった。

そして日本へ

日本の設計業界の「縮図」のような日建で、少しの間リハビリテーションが必要だと思ったのだ。日本の社会的風土に馴染むためにも。日建では色々と我儘なことばかり言

いながら、またやりながらのサラリーマン生活は、退屈でもあり、窮屈でもあった。しかし業務の多さには閉口する反面、幾つかの日建ならではの国策プロジェクトにラッキーにも関わられたのは幸運であった。と言うよりはその手の大型案件が受託できるのを読み込んだ上で雇い入れられた……のは間違いないと思っている。

さらなる新しい冒険と出会いを求めて！！

庭師の小島浅造さんから、Peter Walker まで、かくも多様なランドスケープの「師」に恵まれ、何とかかんとか「運」と「勘」と、ラッキーな「出会い」のみで「やりたい放題」のこの道であったことに気付き、愕然としても、もう時すでに遅し！！過ぎ去った時間は帰ってこない。

イヤイヤそんな筈はないと、新しく自分の Studio を立ち上げて、またまた、まだまだ好き勝手の我が道を邁進することにする。My Way をアクセル全開で。